

Ⅱコリント 1 章 3-11 節

本日の聖書箇所は、伝道者パウロが記したもので、信仰者であっても耐えられないような生きる望みを失うほどの経験をしました。8-9 節にはその時の心情が記されています。「兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知っていてほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。」「死の宣告を受けた思い」とは実に強烈な言葉です。そこでパウロは自分を頼りにすることなく、神を頼りにするようになったとあります。ここで語られていることは、状況が好転することに期待するのではなく、死人の中から復活させた神を頼りにするという決意ともいえるパウロの言葉です。

キリストの苦しみと慰めの一体化

5-6 節では、キリストの苦しみが語られています。つまり、私たちの慰めはキリストの苦しみと結びついているのです。「慰め」というギリシャ語のパラクレーシスは、「傍らに呼ぶ」、「共にいる」という意味です。それが意味することは私たちが苦しむ時「決して孤独ではない」ということです。具体的にいうなら、十字架上で苦しまれたイエス様が傍らにいてくださるということです。ご自身が試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちに慰めを与えられることができるのです。(ヘブライ人への手紙 2:18)

私が子どもを亡くした時、親しくしていた周りの方々は慰め励ましてくださいました。「生きていてくれてありがとう」と声をかけてくれた友人の言葉には、そのように私のことを思ってくれることに慰められ心から感謝しました。しかし一人になると暗闇が襲い所詮、「経験した事のない人には私の気持ちには誰にも分からない」とひねくれ、所詮私は一人ぼっちだ、と孤独感に陥り生きる希望を失い、そのような葛藤の繰り返しでした。

そんな私を全てご存知である神がイエス様と出会わせてくださり、孤独ではないことを教えてくださいました。そのイエス様は、私の罪のために身代わりになってイエス様ご自身も十字架上で苦しみを味わったからこそ、私たちの苦しみや痛みを分かってくくださるイエス様に共感を覚え、究極の慰めを頂くことができました。

究極の慰め

そのようにして、本日の聖書箇所の3節に記されているように、「慈愛に満ち、慰めを豊かにくださる神・・・」慰めを豊かにくださる神の存在を知ったのです。つまり、溢れるほどの慰めを与えてくださるお方が神なのです。4 節では、「あらゆる苦難」とあるように、私たちがどんな苦難に置かれても、その苦しみを神がご存知ないわけがありません。子どもを亡くしたという状況は変わりませんし、悲しみが取り去られた訳でもありませんでした。しかし、その苦しみの中だからこそ、苦しみの中にいなければ聞くことができなかった神の言葉、イエス様の言葉をお聴きすることができたのです。

洗礼準備会等に用いるハイデルベルク信仰問答という、信仰の核心を学ぶための冊子があって、129 の問答から成っています。第一の問いは、「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。答）わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方は御自分の尊い血をもってわたしのす

すべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。また、天にいますわたしの父の御旨でなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜びまたそれにふさわしくなるように、整えてくださるのです。

神は既に全ての人に、イエス様による究極の慰めが与えられています。その慰めはイエス・キリストの十字架にのみあります。そのイエス様の慈しみとあふれるほどの豊かな慰めが与えられ、その眼差しの中にある私たちです。「平和のうちにこの世へ出ていきない・・・」という祝福を受けてここから世に遣わされます。今週も神の豊かな慰めと祝福を信じて平和のうちに歩み出す者とさせていただきたいです。